

# 企画展

## 【概要】

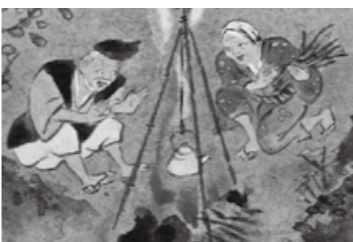
日本唯一の地下資源であった石炭は、明治時代より近代化を進める産業のエネルギー源として、わが国の産業全体を進展させ、国民の生活を支えたといえます。今回の企画展は石炭の発見から江戸時代の石炭事情、明治時代以降の石炭産業の発展をテーマに展覧会を開催します。

## 【鞍手町の石炭産業】

西川流域の石炭採掘については、文政4年（1821年）の触状の写しに木月村貝殻山と、新延村一ノ谷に焚石山鉾山があり、古門村道中に石場（集炭場）があったことがわかります。天保9年（1838年）黒田藩は、芦屋に石炭を統制する役所として焚石会所を設け、遠賀川流域の四郡（嘉麻・穂波・遠賀・鞍手）の石炭の管理をしていました。

## 【石炭発見】

福岡県で最古の石炭は、文明元年（1469年）、三池郡稲荷村の農民伝治左衛門が稲荷山でたき火中に、黒石に燃え移ったことから発見されたと伝えられます。筑豊では、文明10年（1478年）遠賀郡香月村の山中で農夫がたき火中に燃石を発見したのが始めといわれます。



△三池石炭発見伝説図

## 【江戸時代の石炭の記録】

江戸時代の1600年代後半には、黒田藩の儒学者である貝原益軒が『筑前国続風土記』に遠賀、鞍手、嘉麻、宗像、粕屋一帯で村人が燃石を薪の代りに使っていたことを記録しています。同じ頃オランダ商館の医者E・ケンペールは、木屋瀬から黒崎の間に、数箇所の石炭坑を見て、「われらに甚だ稀珍数奇なる



△江戸時代の西川付近の石炭積み出しの様子

もの、注目すべきものとして、示されたり」と記録しています。上の絵は平成2年に石炭資料展示場が完成したときに作成した江戸時代の西川付近の石炭積み出しの様子です。鞍手の人々も石炭を利用していたことが、これらの資料で学ぶことができます。

## 【江戸時代の燃料事情】

古門の伊藤家に伝わる天保2年（1831年）から安政4年（1857年）までの25年間にわたり記録された『家事雑記』には薪、石炭、炭の入手や利用の状況の記録があります。薪は6月から7月にかけての採集は少ないものの、毎月行われ、特に12月から1月の採集回数は多いといえます。

石炭は天保9年（1838年）2月6日に風呂たき用に「石から」を購入し、60文を支払っている記録が最初です。その後は、年に1回程度の利用でした。弘化3年（1846年）より年に数回の購入記録があります。弘化4年（1847年）以降は12月末から1月初めに集中して購入しています。安政3年（1856年）1月7日の購入記録が最後となっています。



△芦屋焚石会所（芦屋町教育委員会提供）

江戸時代の燃料事情は、一般庶民の間では薪が主流を占め、石炭の利用は少なく、あくまでも石炭はごく限られた場合のみ使われていたと思われる。

# 特集 鞍手石炭ものがたり

## 【手掘りの採炭】

小規模炭坑では、天井の崩落を防ぐために人がやっと入れる大きさの穴を掘り、石炭を掘り出していました。一般的には2人1組となり、ツルハシ（石炭を掘る道具）で掘った石炭をソリ状の木箱や背負いかゴで運び出していました。



△石炭運び出しの様子（田川市石炭・歴史博物館提供）

## 【西川の石炭輸送】

明治時代に入ると西川流域には多くの小炭坑が生まれ、掘り出された石炭は船積場（川勘場）まで人力や、馬車で運び、川ひらたに積み替えて芦屋・若松等へ送られました。西川には上流から八尋の川端と小木橋、木月の浮殿と大橋、遠賀町の木守と今古賀に6箇所の川勘場がありました。



△明治42年西川大橋完成記念式と川ひらた

川から陸へ 石炭産出量の増加で明治41年（1908年）室木線が開通し、石炭の輸送手段は川舟から汽車へと変わってきました。また、大正年間にはできた三菱新入炭坑6坑・7坑より掘り出された石炭は筑豊線小牧信号場（現在の鞍手駅）より分岐した、専用線によって運搬されました。

## 【企業の石炭採掘】

明治20年代、筑豊地域には石炭採掘を目的に三菱鉱業、三井鉾山などの企業が進出し、大規模な開発が進められました。明治政府が目指した「殖産興業」政策の一つとして、近代工業のエネルギー源を確保することは国家の威信をかけた重要事項であったと考えられます。



△三菱新入6坑選炭場

三菱鉱業は大正時代には野山であった中山に、新入6坑、第7坑を開き、石炭産業の拠点を開設しました。80年以上経った今は、石炭を運んだエンドレス（動力の捲機で炭車や人車を運搬する方法）や引込み線は幹線道路に、炭坑住宅は形を変え、主要な居住地域として引き継がれています。現在では、その時代の雄姿を物語る面影はなかなか見出すことはできませんが、この地で育まれた最先端の技術やエネルギー源は継承された産業の礎となつて息づいていることと思います。

町の石炭産出量は、昭和32年（1957年）頃で年間約50万トン以上の生産で、筑豊炭田の約7%から8%（福岡県では約3%）を占めていました。石炭鉱業合理化事業団の資料によると、町の年間石炭生産量は、約52万3千トンを出炭していたことが、うかがいされます。



△三菱新入6坑の捲上機

入館料無料

2010

10月30日 土 - 12月18日 土

開館時間：午前9時～午後5時

休館日：毎週月曜日、第3日曜日、祝日

鞍手町歴史民俗資料館

〒807-1311

福岡県鞍手郡鞍手町大字小牧 2097 番地

TEL 0949 - 42 - 3200

\*\*鞍手の石炭、炭坑の歴史でその時代を懐古してみませんか\*\*